

1. 研修の概要

研修期間：2016 年 12 月 18 日～2017 年 1 月 5 日（19 日間）

訪問先：ニュージーランド サウスアイランド

- 消防博物館（The Hall of Flame Fire Museum）
- カンタベリー博物館, クエイキシティ（Canterbury Museum, Quake City）
- サウス・カンタベリー博物館（South Canterbury Museum）
- オタゴ博物館（Otago Museum）
- オタゴ入植者博物館（Toitu Otago Settlers Museum）
- オケインズ湾マオリと入植者博物館（Okains Bay Maori and Colonial Museum）
- 国際南極センター（International Antarctic Centre）
- 空軍博物館（Air Force Museum of New Zealand）

2. 目的

少子化に伴い一人ひとりへの教育的待遇の拡充とその成果が求められる中、図書館はこの課題の解決に自ら乗り出し、独自に蓄積されたノウハウを活用しながらより低い年齢層へと生涯教育を普及させることに成功した。一方で、博物館は扱う領域の広さや従来想定されていた対象年齢と現状とのミスマッチ、あるいはこれらを横断的に捉え解決してゆくことの出来る人材の不足などの諸問題を抱えたまま、いまだ十分に乳幼児期の学習へとアプローチできていない。

このような背景をもとに、本研修では子ども対象のミュージアムプログラムが文理問わず豊富であるニュージーランドにて施設見学およびインタビューを行いながら、幅広い年代に日常的に活用され得るミュージアムとどのようなか観察することを目的と定めた。

研修に先立ち、対象施設とはあらかじめメールでの質疑応答を交わした上で、現地ミュージアムツアーに参加した

3. The Hall of Flame Fire Museum

一度はカンタベリー地震によって大きなダメージを受けながらも、人々からの切なる要望と地元消防の熱意とにより、2015 年に再び開館された経緯を持つ。施設長の Brian Joyce 氏によれば「ニュージーランドは非常にボランティア活動の盛んな国で、多くの団体において正職員よりボランティアの数のほうが多いとさえ考えられる。この施設だけでも 60 名を超えるミュージアムボランティアを擁しており、各々が解説員や機器整備等の重要なパートを担っている」という。Joyce 氏はまた「個人の時間を割いて活動してくれているボランティアには他施設との交流にかかる時間はほとんどなく、展示のノウハウ不足には常に悩んでいる。これから（交流の）体制を整えて行く必要があると強く感じている」とも語ってくれた。

4. Canterbury Museum/Quake City

館全体を通して囲いが少なく、来館者が出来るだけ展示物に近づけるよう配慮されていた。館内には子供対象の有料ゾーンである「Discovery」が設けられている。コンパクトな室内に骨格標本や熱帯魚水槽、現地独特の動物たちの剥製、プロジェクションマッピングなどが所狭しと設置しており、それらのほとんどすべてに触れて観察することができる。訪問当日は、宿題のノートを持った子どもやその家族たちが熱心に展示物を観察する姿が見られた。なお、頻繁に来館する家族に向けて Museum Explorer Club 年間パスポートが用意されている。館内のシーズナルプログラム（私の訪問した時期は「サンタクロースを探せ！」であった）と併せて、リピーターには魅力的な制度である。

5. South Canterbury Museum

二階建てのちぢみまりとした建物でありながら、入植にまつわる歴史や郷土の生態系など、幅広い領域が凝縮された展示であった。インタビューに応じてくださった Ruth Gardiner 氏によると、「施設自体は非常にコンパクトだが、子連れの家族と小学生の校外学習による利用が大部分を占めているため、あらゆるところへ気を配れるなど、かえって使いやすい。大仕掛けな博物館では難しい郷土密着型の展示を心掛け、通りかかるついでにいつでも立ち寄れる博物館でありたい」とのことであった。受付のすぐ近くにはハンズオン展示（ステレオスコープ：古い時代の写真を立体的に見ることが出来る）が用意されており、Explorers' Club（子供用のミュージアムファンクラブ）に参加中の子供たちが手にとって楽しんでいた。

6. Otago Museum

オタゴ大学のほど近くに位置する総合博物館である。全館を通してハンズオンに重きを置いており、特に子供が主役となる Discovery world 内ではほとんどのものに触ることが出来る。他にも Tropical Forest には蝶の生態展示が、Perpetual Guardian Planetarium には 3D 上映施設がある。1 日ですべてのコーナーを巡ることは困難であるとさえ考えられる程のコンテンツが収容されていることについて、受付スタッフは「ようやくこれらの膨大な展示を見終わったかと思いきや、いつの間にかどこかが変わっている。博物館が必死に走り続けることで、来館者もその知に追いつこうとしてくれる。共に生み出すことが、リピーターを生み出す仕掛け」であると語ってくれた。

7. Toitu Otago Settlers Museum

ニュージーランドの移民史（郷土生活史）に特化した博物館である。その土地で起きたことを地元住民の姿と声で語るビジュアルツールや、実際に街中に掲示してあったポスター、つい先頃まで使用されていた洗濯機などがパズルのように棚へ嵌め込まれ、自らも街の歴史そのものであることを体感しながら巡ることが出来る。引退した汽車の置かれた広場では、不定期にダンス・アクティビティが開催される。騒がしいことを気にする人はいないのかと尋ねたところ、受付担当者は「ここでは踊っても良いし、声を出して笑っても良い。ニュージーランドの宝は子どもだから、彼らが大人になっても“感じる心”を忘れないように教えたい。それが今大人である自分たちにはできること」と語ってくれた。

8. Okains Bay Maori and Colonial Museum

規模は小さいながらも、マオリと入植者が実際に使用していた道具など、数多くの展示が観られた。マオリの手による彫刻や実物大のマラエ（マオリ族の集会所）も収容する。ただし規則に沿った展示にはなっておらず、陳列に留まる。また予算上の都合から保存環境は完全でなく、木や骨などの生物由来の素材を使用した展

示品には常に不安があるそうである。大きな市街地からはかなりの距離があるが、筆者のほかに4名ほどの来館者があり、熱心に見学や質問をしていた。

9. International Antarctic Centre

「南極」をキーワードに、ペンギンの生態展示や気温体験施設などダイナミックな展示が展開される。クライストチャーチ空港に程近いためか、館内は「年間を通して非常に混雑している（受付担当者談）」。訪問当日もゆっくり展示を観ることが難しかった。体験エリアに加えて、南極観測所での生活や環境にまつわる力の入ったキャプションも多く、人数をコントロールさえできれば大変効果的な学習施設であると感じた。手で触れる展示よりも音声や映像などがふんだんに扱われている。なお入館料とは別料金で Hagglund Ride というコースが用意されており、実際に南極で使用されている氷上車に乗ってエリア内を周遊することができる。大人と子供の境界線を感じることなく楽しく過ごせるという意味において、博物館の性質を兼ね備えたテーマパークという表現が適切であろう。

10. Air Force Museum of New Zealand

軍用機をメインとした展示でありながら、年間を通して子供向けイベントが用意されているなど、幅広い年齢を受け入れる態勢が整えられている。筆者が訪問したときに行われていたイベントは、動物のシールが貼ってある場所でキーワードを集め、受付でプレゼントと交換出来るというもので、5名ほどの未就学児が暗い館内を怖がることもなく楽しんでいた。大人向けには無料のバックヤードツアーがあり（通年）、空軍OBのボランティアとともに常設展とは別の収蔵エリアを巡ることが出来る。なお収蔵エリアでは軍用機に加えて消防関連車両の整備も手がけられており、専属の修理工が忙しげに手を動かしていた。ボランティアの Jeff Rose 氏によれば「将来あるかもしれない展示拡張に向けて、できることから準備をはじめたい」とのことであった。

11. ミュージアムスタッフの働き方

今回の研修で訪問したミュージアムのうち、The Hall Of Flame Fire Museum と Okains Bay Maori and Colonial Museum を除くすべての館に教育スタッフ（必ずしも学芸員ではない）がおり、子どもやその保護者に対するプログラムを作成している。驚いたことに、彼らの全てが館に直接雇用されており、また、専任・兼任の差はあれど安定した雇用体制の中で長期的にその専門性を発揮しているとのことであった。（ニュージーランドは社会におけるミュージアムの立ち位置に篤い理解のあるヨーロッパ文化を色濃く受け継いでいるため、数年単位での異動が常である日本のミュージアムの状況を話したところ、「そのような短期間で専門家が育つのか？」との意見をもらう場面もあった。）単一の業務を極めることをよしとするニュージーランドと、多種多様な業務を経験することをよしとする我が国。改めて、両国の職務に対する考え方には大きな差異があると感じた。

12. 発達段階に応じたアプローチ

子ども向けに展示を作るにあたって「簡単なことばに言い換えれば理解してもらえるのではないか」「装飾を保育園風に向けにすればよいのではないか」という誤解を目にする。しかし大人の想像した子どもの視線のみ追いかけることでは、十分な内容の展示は実現できない。なぜなら、大人と子どもでは展示物に対して着眼点が異なり、物理的視線自体も大きく異なるからである。

展示を担当する者は子どもの行動特性を知った上で、その知的・社会的発達段階にふさわしい準備をすることが求められる。たとえば展示の対象を乳幼児期の子どもとする場合、この時期に際立って鋭敏である視覚・聴覚・嗅覚の三感覚に訴えかけることで、外界からの刺激を楽しみながら受け止めてもらうことが出来る。こ

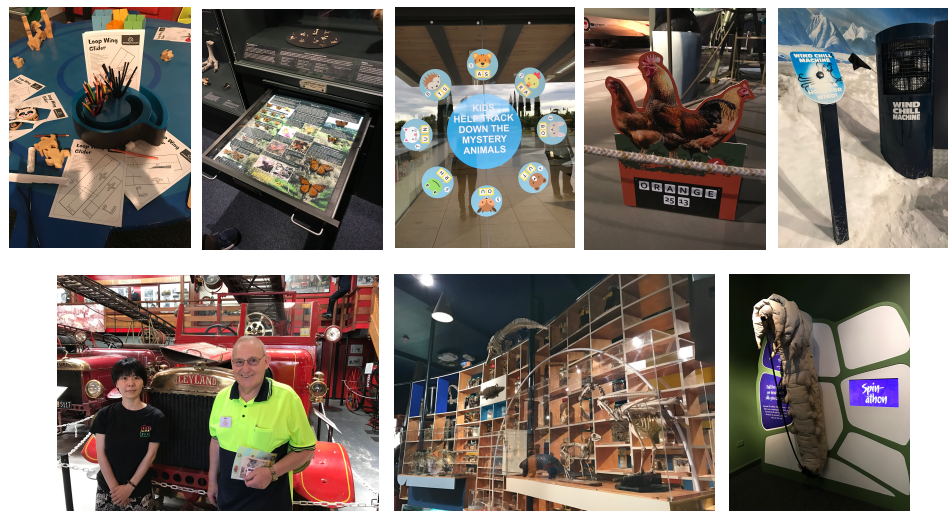
のような展示あるいはプログラムは、もちろん、子どもと実際にふれあう教育担当者と共に組み上げられることが望ましい。各施設ごとに独特の視点を持って運営が行われていたが、どの施設をとっても、子どもの発達についてよく研究すること、その上で対応を行うことをすなわち子育て支援と認識しているようであった。

13. まとめ

我が国のミュージアムにおいては、博物館側が用意した資料を用いて学習者にレクチャーする（ミュージアムが伝えたいテーマを提示し、それに合致する学習者にのみ来てもらう）というスタイルは普及しているが、学習者の持つ課題へのソリューション提案を中心としたプログラム実施については、まだ十分着手出来ていないとは言えない。一方で、ニュージーランドのいたるところで学習者側のニーズに積極的に働きかける試みが豊富であることは、学習に際して能動的であること強く求められる国ならではの様相と言えよう。

例えば South Canterbury Museum の Explorers' club では、学習者が何を知りたいのか、本人に直接問いかけることも多い。質問によってある程度学習者の問題意識を把握したあと、展示を使ってそれらを解決するためのツアーやワークショップが行われる。そうすることで学習者にとっては目的を明確に持った状態でミュージアムを巡ることになるため必要な情報をピックアップしやすくなり、ミュージアムにとっては学習者達の問題意識の傾向を把握することが出来るため、企画の効率的な改善に繋げてゆけるというメリットがある。

机上で学んだ事柄について、あるいは何気ない日常でふと浮かんだ疑問について、知りたいという明確な目的意識のもとに感覚を総動員して自ら捉えなおすことで、それらが生きた知恵となって実生活に届く。こうした繰り返しから得た充足感が、来館者の満足度を大きく上げるのだろう。施設内ですれ違うどの来館者についても、大変うおいのある表情であったのが印象的であった。



謝辞

今回、このように貴重な機会を与えてくださった図書館情報メディア研究科、知識情報・図書館学類茗溪会支部図書館情報学橋会の皆様には篤く御礼申し上げます。また本研修を実施するにあたり様々なご助言を下さった Lincoln University の Robin McNulty 准教授、現地コーディネーターに尽力して頂いた Kyle McMillan 氏に心より感謝を申し上げます。